

千畝の記憶

岐阜からたどる足跡

第8部 現代の難民編⑤

玄関の扉を蹴破り、銃を手にしたイスラエル兵が押し入ってきた。顔にまで迷彩を施した完全武装の姿だった。

今年3月、心療内科医の桑山紀彦(54)＝高山市出身＝が、ヨルダン川西岸地区の民家を訪れた時のこと。泊めてくれた臨床心理士ナーセルは言った。「いつものことだ。慣れるしかないよ」トランプ米大統領のエルサレム首都認定で緊張が高まるパレスチナ自治区。桑山は今春、その西岸地区ラマラ近郊のジャラゾーン難民キャンプで、心のケアを始めた。

身内を銃で撃たれたり、兵士の理不尽な暴力を間近で見てきたパレスチナ人の

紛争の地 共存探る

子ども100人をワークショップ形式でケアする。そのままで、大人になった時に怒りで銃を持つ。その連鎖を断ち切りたい」という思いからだ。

自らの人生の土台を確認する「シオラマ制作」では、子どもが粘土で「住みたい理想の街」を作った。そこには、ユダヤ人入植地を隔てる壁も監視塔も無い。公

園やモスク(礼拝所)、学校などごく当たり前の街が出来上がった。

他者を演じて心を整理し、想像力を取り戻す「映画ワークショップ」にも取り組む。桑山がイスラエルとの共存を考える脚本を書くとき、読んだ現地職員の顔色が変わった。「共存って何? 攻めてきたのは向こう。私たちは普通に暮らして

ただただだったのに」

ユダヤ人が2000年前にパレスチナの地を追われて祖国を失い、第2次世界大戦でホロコースト(ユダヤ人大量虐殺)に遭ったユダヤ人側の背景を説くが、

納得してもらえない。最後はせりふの一部を変えることで折り合った。

を語るなら、パレスチナ和平は避けて通れない」という思いからだ。空爆下で救命救急や患者搬送にあたったこともある。

国内に戻ると、世界で出会った難民や被災者の姿をギター演奏と映像で紹介する「地球のステージ」に取り組む。

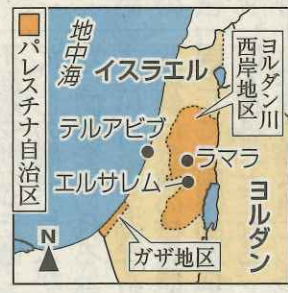
現在は神奈川県海老名市を拠点に年150回の公演

パレスチナで子どもたちの心をケア



「地球のステージ」の後に生徒と懇談する桑山紀彦さん。「伝えたかったのは、考えることをやめないでということ」と説いた＝今月1日、羽島市竹鼻町、羽島高校

ハレスチナ難民 1948年のイスラエル建国や67年の第3次中東戦争で居住地を追われ周辺国などに逃れたパレスチナ人と子孫で、約500万人いる。大半がイスラム教徒。パレスチナ自治区ガザ地区に130万人、西岸地区に80万人の登録難民がいる。帰還を主張しているがイスラエルは拒否している。



ことをやめちゃいけない。思考停止になって感情に任せるとき、争いが始まる」。歴史も宗教も現在の境遇も異なる二つの民族。複雑に絡み合った対立を前に「間に入る日本人でありたい」と考える。

カンボジアやソマリア、東ティモールなどの紛争地で医療支援に携わり、パレスチナ自治区では2003年からガザ地区で心のケアを続けてきた。「世界平和

を重ねており、96年の開始からの累計は3600回超。参加人数は100万人を数える。学校を中心に回るのは、草の根から平和の意識を積み上げたいという思いから。子どもが変われば、それを見て大人も変わると考えている。「1人の力は微力だけれど、無力じゃない。1人の人間として、できることをやろうというのは、杉原千畝さんと同じなんじゃないかな」。これからも世界を駆け回り、悩む人たちに向き合いつつもりである。(敬称略) (第8部は堀尚人が担当しました。この連載は今回で終了します)